

博物館にまつわる数字

おおしまみつはる
大島光春 (学芸員)

表 当館の事業費とその推移 (金額は千円単位)

年度	H6(1994)	H7(1995)	H8(1996)	H9(1997)	H10(1998)	H11(1999)	H12(2000)	H13(2001)	H14(2002)	H15(2003)
維持運営費	53,085	379,147	413,472	420,881	415,138	355,363	269,258	243,870	238,778	226,577
展示事業費	11,743	44,794	55,240	40,848	35,321	27,892	27,046	27,475	28,440	24,156
調査研究費	2,130	9,082	9,081	8,323	7,683	5,300	4,700	15,813	3,246	2,743
資料整備費	25,075	28,820	22,564	20,163	15,198	10,599	9,900	8,800	7,802	7,492
学習支援事業費		9,300	9,205	7,714	5,655	4,210	3,690	3,320	3,048	2,590
アカデミー事業費	68,463	360	323	273	226	190	270	138	202	172
情報システム事業費		7,280	5,216	4,568	4,178	4,275	4,961	4,174	3,685	4,004
合計	160,496	478,783	515,101	502,770	483,399	407,829	319,825	303,590	285,201	267,734
前年比			108%	98%	96%	84%	78%	95%	94%	94%
H8を100として			100%	98%	94%	79%	63%	59%	55%	52%

はじめに

博物館の職員は、一般に入館者数だけで博物館の価値や活動を評価されるのをいやがります。理由はいろいろありますが、その根底にあるのは「博物館の役割は、利益を追求するレジャー施設とは違い、人を呼べれば良いというものではない」という思いだと私は考えています。とはいえ、たとえ“親方日の丸”でも、国公立博物館の立場は、昨今の行政改革の動きや厳しい経済情勢の中にあつて、存在意義がアピールできないと縮小・閉鎖などということになりかねません。そのようなことにならないように、博物館の立場を、何にも知らない人に対してでも、

わかりやすく説明でき、説得もしやすいのは数字に違いありません。

そこで、開館10周年を迎えるにあたり、小文では年報などで公表されている数字を使って、当博物館の7年(年報が刊行されている分)を振り返ってみることにしました。また、ほぼ同じ時期にオープンした県立の他館と比較することによって、当館のポジションを概観します。

この作業に当たっては各博物館が年報などに掲載している予算の事業名や区切り方が一様ではないので、私の整理が適切でない場合があるかもしれません。そうした場合にはご容赦いただき、ご指導いただければ幸いです。また、私がこのような内容を考えたきっかけは、福井県立恐竜博物館の学芸員の方々からいただきました。記して感謝いたします。

また、当館が設置されたのは平成7(1995)年1月1日で、開館は3月20日です。予算は四半期分、入館者は10日足らずであるため、ここでは平成6(1994)年度のことは取り上げません。

当館の予算推移

さて、表をみていきましょう(県民アカデミーは県立機関活用講座に変わっています)。上から合計までが年報に記載されているデータです。最高額を記録した平成8(1996)年を100として以降の減り方をみてみましょう。平成11(1999)年に前年比84%となっています。さらに、翌年度には前年比78%という記録的な削減が敢行されました。その後も毎年減り続け、平成15(2003)年度に平成8(1996)年度比52%まで落ち込んだ予算は翌年度、当然50%を割り込みました。

削減の著しい予算項目

ではどのような減り方(削減のされ方)をしたのでしょうか? 予算の大部分を占める維持運営費(図1)は、平成15(2003)年度では平成8(1996)年度比55%です。額は小さいですが、情報システム事業費は同77%です。どこかにしわ寄せが行きます。削減額が大きいのは展示事業費で平成8(1996)年度比44%(3100万円減)、割合が大きいのは学習支援事業費同28%、調査研究費同30%、資料整備費同33%です(図2)。私はこの部分こそ博物館のもっとも重要な部分だと思うのですが…。

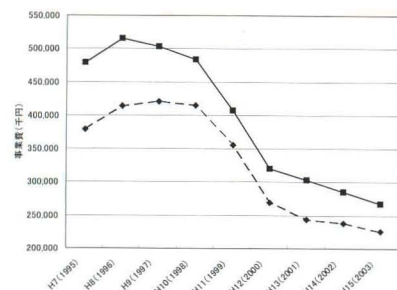


図1 当館の■総事業費と◆維持運営費。

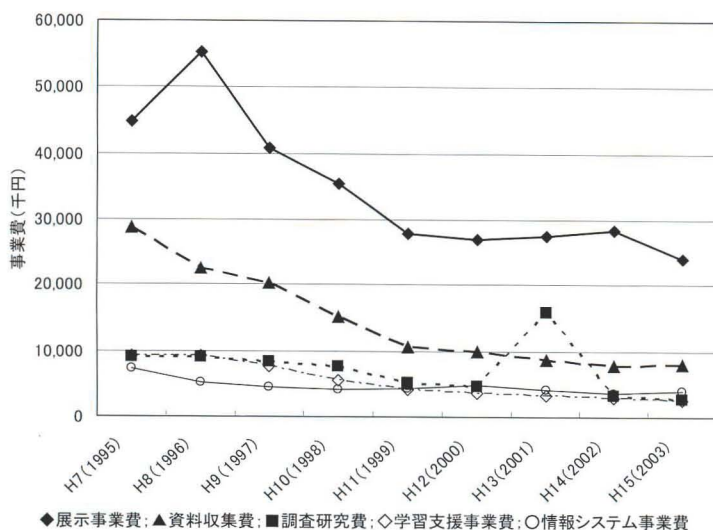


図2 維持運営費を除いた当館の事業費。

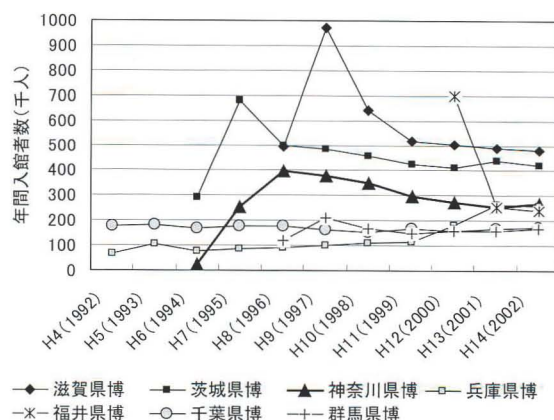


図3 各館の年間入館者数の推移。

平成13(2001)年度の調査研究費が翌年の5倍もあります。調査研究費には「研究報告」や「神奈川自然誌資料」などの印刷費も含まれるのですが、この年は「神奈川県植物誌2001」(¥9,800 当館ミュージアムショップで販売中)が刊行された年です。同誌の売り上げは、博物館ではなく、県の収入となるため、研究費は実質的には全く増えていません。

入館者数の推移

景気が悪くなり、事業費が減る中で、入館数はどのように推移したのかをみましょう。ここからは必要に応じて他館のデータと比較してみたいと思います。

冒頭にも述べたとおり、比較に選んだのは当館と同じ時期に設立した県立の自然史(一部に人文系や水族館を含む)博物館です。具体的には茨城県自然博物館、千葉県立中央博物館、群馬県立自然史博物館、福井県立恐竜博物館、滋賀県立琵琶湖博物館、兵庫県立人と自然の博物館です(以下○○県博と略します)。

図3では滋賀県博と茨城県博が、開館の翌年に大きなピークを迎え、激減した後、徐々に減少するという、典型的なプロファイルを示しています。兵庫県博は平成11(1999)年度まで微増を続け、翌年、翌々年と入館者が急に増加しています。これはまれなケースです。入館者の増加を目指す場合には、このとき兵庫県博で何が行われたのかを調べる必

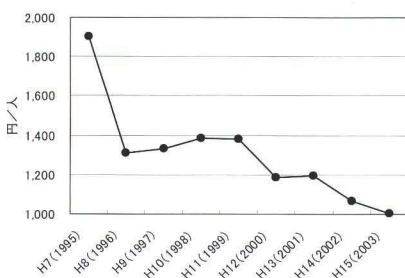


図4 当館の事業費／入館者数の推移。

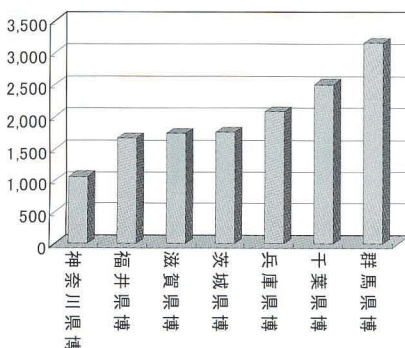


図5 各館の事業費／入館者数 (H14)。

要がありそうです。データの得られた中でもっとも最近の平成14(2002)年度を見ると、17万人前後が2館、25万人前後が3館、40万人以上が2館ということで当館は、「普通」といったところでしょうか？

事業費と入館者

事業費と入館者数がわかったところで、事業費を入館者数で割ってみましょう。そうすると入館者一人あたりにどれくらいの費用がかかっているかがわかります。当館の場合は図4で、平成8(1996)年度から平成11(1999)年度まで1,300～1,400円/人だったのが翌年から下がりはじめ、平成15(2003)年度には1,000円/人まで下がっています。事業費が減額されていても、何とか入館者数を保ち続けている結果でしょう。ちなみに当館の大人の入館料は510円です。

では次に他館を見てみましょう。図5は平成14(2002)年度のデータです。福井県博、滋賀県博、茨城県博の1,700円/人前後から群馬県博の3,000円/人超までありますが、兵庫県博の2,000円/人が平均的なところでしょう。

事業費と床面積

図6の床面積をみていきましょう。これは、事業費を展示室やバックヤード(駐車場などを除く)など、博物館の床面積で割った値です。つまり博物館の床1㎡にいくらお金をかけているかということです。当館が2万円/㎡を切って最安、2万円/㎡代が福井県博、兵庫県博、千葉県博の3館。もっとも高いのが茨城県博で6万円/㎡を超えています。平均では3.5万円/㎡というところで、滋賀県博がちょうどそれくらいです。

茨城県博は、群馬県博と並んで12,000㎡と狭いのに、年間42万人もの入館者を集められるのは、それなりにお金をかけているといえそうです。群馬県博も当館の2倍以上です。

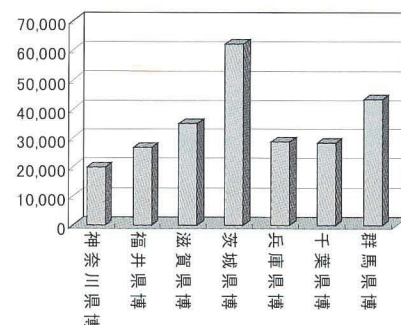


図6 各館の事業費／床面積 (H14)。

入館者数と学芸員数

博物館の専門職員として勤めているのは学芸員ですから、博物館のマンパワーの源として、学芸員数を見ていきましょう。

学芸員数が圧倒的に多いのは千葉県博の58人です。海の分館などが含まれていることを考慮しても多いのは確かです。2位が兵庫県博で37人、次が滋賀県博の32人です。その他の4館は20人未満です。

図7は年間入館者数を学芸員数で割ったものです。学芸員1人あたり何人の入館者を背負っているかということです。実際に入館者と接する機会は案内員や解説員の方が多いのですが、博物館の姿勢の問題です。茨城県博と福井県博が2万人入館者/学芸員を超えています。滋賀県博と群馬県博、当館が13,000～15,000人入館者/学芸員で中庸、兵庫県博が7千人入館者/学芸員、千葉県博が3千人入館者/学芸員です。

おわりに

今回取り上げた他館との比較において、当館のポジションは、事業費は最低レベル、そのほかは平均的レベルといえそうです。その最低レベルの事業費の中で特に削減が著しい項目は、学習支援、調査研究、資料整備のための費用です。

当館に限らず、自然史博物館には元々の役割に加え、学校5日制への対応や理科離れ対策など学校教育との連携、いわゆる「環境問題」の研究や教育などが期待されています。その状況で「私たちは少ない予算で良くやっているので、ご褒美に予算を増やしてください」というのが私の本音ですが、世の中そんなに甘くはないようです。

小文を読んでいただき、これから当館がどのような方向へ進むべきなのか、どうすれば良いのかを皆で議論するきっかけや、根拠になったら良いと考えています。

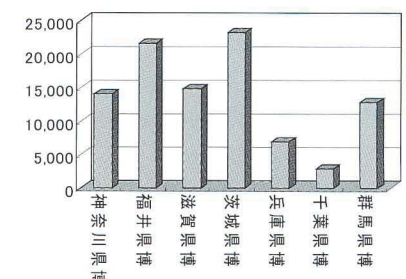


図7 各館の入館者数／学芸員数 (H14)。